

ゼロカーボンミーティング 2024in 北信州×北信地域タウンミーティング 2024

暮らしの中のゼロカーボン ～ 未来に向けて 今 私達一人ひとりができること～

イベント開催レポート

R7.1.22 会場：飯山市文化交流館なちゅら

長野県北信地域振興局では、(公財)長野県長寿社会開発センター北信支部とタイアップして、「ゼロカーボンミーティング 2024in 北信州×北信地域タウンミーティング 2024」を令和7年1月22日に開催しました。

ゼロカーボン社会の実現に向けた北信地域の行動につなげるため、「ゼロカーボンとは何か、なぜ必要なのか」を一人ひとりが認識し、私達の未来に向けて「自分にもできること」をあらためて考え共有する場をしたいと思います。ミーティングのテーマを「暮らしの中のゼロカーボン ～未来に向けて 今 私達一人ひとりができること～」に設定しました。

当日は総勢 200 名と大勢の方に参加いただき、北信地域におけるこのテーマへの関心の高さが伺えました。環境分野に長く携わってこられた講師による基調講演や、北信地域での身近な取組事例を聴講できる有意義な機会であったとともに、参加された皆さんの新たな行動につながることを期待できる場にもなった感じが感じられました。



主催者あいさつ

【主催者：長野県北信地域振興局 小池 広益 局長】



「ゼロカーボン」とは温室効果ガスを減らしていこうというもの。温室効果ガスによる地球温暖化で起こる気候変動を食い止めなければ、冬場に雪が降らなくなり、北信地域の大きな産業であるスキー場が成り立たなくなる等、私達の生活に大きな影響を与える。

長野県では、温室効果ガスの正味排出量を 2030 年度までに約6割削減するという目標を掲げて取り組んでいるところ。

しかし、県だけでゼロカーボン社会を実現できるものではなく、事業者の活動や私達一人ひとりの暮らしの中で危機感を共有し取組んでいくことが重要である。「未来に向けて」というテーマのこのミーティングが、持続可能な社会をつくっていく上で何ができるかを考えるきっかけとなり、それぞれが具体的な行動に移していただくことで、この北信地域でのゼロカーボンの取組がより進んでいくことを期待しております。

【基調講演】「わたしたちの未来に向けて

渋沢栄一（江戸～戦前）・渋沢寿一（戦後～令和）それぞれのゼロカーボン」

渋沢 寿一 氏（NPO 法人共存の森ネットワーク理事長/農学博士）



【江戸～戦前】

- ・渋沢栄一を育てた江戸時代は徹底した循環型社会。限られた資源をどう有効に使うか「資源生産性」を目指した時代であり、まさに「ゼロカーボン」。
- ・曾祖父母、祖父母の時代（戦前）は、物を徹底的に使うのはあたり前。例えば、「着物」が傷めば「寝巻」にし、「寝巻」が傷めば「おむつ」にし、「おむつ」が傷めば「雑巾」にするといった具合に、繊維は粉になるまで使い切っていた時代。「ゼロカーボン」

」は決して新しいことではなくあたり前に存在し、地球に負荷をかけない社会だった。

【戦後～令和】

- ・高度経済成長期以降の60年は、経済的価値を重視して生きることが幸せという価値観の「労働生産性」の時代。これにより生活の便利さを優先し、そのための機器類やエネルギーを得ようとする中で様々な問題が発生するようになった。
- ・私達が「普通」と思っている暮らしは、地球から見ると「異常」である。現在の「普通の暮らし」は持続可能ではない。目先のことだけ優先している世界は恐竜の世界と変わらない。ただ、今後20～30年でどう変わるか示すことができるのが我々人間だと思っている。
- ・今後、子どもも大人も考えるべき最優先の課題は「人類と地球の共存」。地球に負荷をかけない暮らしの最大のヒントは、先祖からずっとつないできた「過去の暮らし」。
- ・「共感づくり」ができないと、地域内循環経済は機能しない。「人と人の関係性」「人と自然の関係性」「世代を超えた関係性」からつながりが生まれる。ゼロカーボンの実現には、地域内のつながりが必要である。

【事例紹介】ゼロカーボンの取組事例紹介

旗上げアンケート方式ディスカッション

アドバイザー：渋沢 寿一 氏 ファシリテーター：内山 二郎 氏

（フリージャーナリスト）

【パン工房〇(まる) 宮田 伸也 氏】

- ・子ども達の独立を機に、中学校の教員からパン職人に転職。令和6年4月開業。
- ・店名の「〇(まる)」は、自分やお客さまはもちろん、地球や社会にとってもプラスになるようなパン屋にしたいと考えてつけたもの。「地球に優しい(〇)、体に優しい(〇)、食べ物を捨てない(廃棄ゼロ=〇)、地域の良さを丸(〇)ごと生かす」「循環型社会(循環=〇)に貢献」といった思いを込めている。

- ・ゼロカーボンに向けた取組として、太陽光パネルの設置による発電や電気自動車による移動販売をはじめ、薪窯の使用、パンの紙包装、売り切るだけの生産量(廃棄ロスを出さない)、地元の素材を使った地産地消等がある。
- ・お客さまの中には、環境に配慮したお店として理解を示してくれる方もいる。パンを通してお客さまとの会話が生まれ、それによって地域の皆さんが集まってくるコミュニケーションの場にもなればよいと思う。

【NPO 法人すがかわ暮らし応援隊 外山 俊 氏】

- ・平成25年に地域の区長を経験。その際に、過疎と高齢化・田畑の荒廃化に危機感をもち、すがかわ暮らし応援隊を設立、令和5年にNPO法人化。高齢者世帯の生活支援や、移住者への支援等を行っている。



- ・活動のうち、森林整備・自然エネルギー活用事業として、支障木を薪に加工しての販売や「私たちにもできるゼロカーボン生活」のイベントを令和6年5月に開催。
- ・イベントは、地域の皆さんに温暖化を意識し関心をもってもらうことを目的に企画。薪ストーブや電気自動車の展示、生活用品のリサイクル等のゼロカーボンに関するブースを設けて開催した。
- ・これらの活動は、継続することが必要だと思っている。その上での課題は後継者づくり。特に、若い世代にどうやって興味をもってもらうかが大事。

【長野県下高井農林高等学校 宇田 貴浩 さん(環境創造コース・3年)、片桐 杏奈 教諭】

- ・農業高校という特性を活かして、学校のSDGs宣言の目標を地域と共に達成していくという方針のもと、農業・林業・食・環境を通してSDGs宣言と向き合う授業を行っている。
- ・環境創造コースの放置竹林に対する取組もその1つ。原材料が竹から使いやすいプラスチックに変わってしまった影響で増えてしまったことを学び、少しでも放置竹林を減らそうと、生徒が実際に整備・間伐を行っている。また、地域の皆さんとバンブーキャンドルを製作するワークショップを実施する等、放置竹林の現状を知ってもらう活動も行っている。
- ・竹を通して地域につながり、世代間の交流が生まれている。

💡アドバイザーからの一言 ▶ **【地域とのつながり、人と人との交流を大切に！】**

若い世代が共感をもつ社会に変わっていくこと→持続可能なゼロカーボン社会につながる

【旗上げアンケート方式ディスカッション】

基調講演及び取組事例を聴講後、参加者があらかじめ用意された設問に対して色分けされた紙を掲げることで会場全体の意見を可視化・共有する、「旗上げアンケート方式ディスカッション」を行いました。

設問は、①講演会や3人の事例紹介を聞いて感じたこと ②ゼロカーボンの取組で自分でもやっていること ③ゼロカーボンの取組が広がるために必要なこと の3問を用意し、「いろいろな活動を知り、自分にもできる



ることをやってみようと思った。」「工夫することで暮らしを変え、未来へつなげていきたい。」「一人ひとりが行動を起こし、それを地域全体の取組としていくことが大切だと感じた。」といった活発な意見を聞くことができました。